慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スペイン史における低地諸国の盛衰
Sub Title	Una aproximación a la historia de los Países Bajos meridionales bajo el dominio español
Author	前田, 伸人(Maeda, Nobuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.25 (2010.) ,p.183- 207
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20100531-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スペイン史における低地諸国の盛衰

前　田　伸　人

序章

1．はじめに

2009年11月，EU は初代大統領に，ベルギー首相のヘルマン・ファン・ロンパイ氏を選出した。地方の権限強化を謳って当選したイヴ・ルテルム首相は，ベルギー政治の混乱を収拾できず，大手銀行売却をめぐる問題で結局辞職した。その後ベルギーの舵取りを任されたのがファン・ロンパイ氏だった。政治的混乱を収拾した矢先，その手腕を買われ，EU の最高首脳になった。もっとも，彼の選出には，仏のサルコジ大統領や独のメルケル首相が英米の影響力を排除するため動いたようだ。

こうした挿話の中にベルギーの位置が浮彫りになる。一つは，国内の調整に精力を費やされることだ。言語対立がその代表例だ。同国は，北部がフラマン語地域，南部がワロン語地域だが，独立以来主導権を握ってきたのは，炭田や鉄山を控えて工業が栄える南部で，農業地域の北部を圧していた。だが二十世紀末になり，南部は第二次産業が凋落する一方，北部は先端技術業の発達で興隆した。ルテルム氏の主張はこうした地方の構造転換が背景にある。またルーヴァン大学は1970年代初頭に言語別に大学が分割された。二つ目は，地政学的問題だ。二度の世界大戦で低地諸国は独の侵攻に蹂躙されている。アルデンヌ高原を除けば平坦な地が続き，軍事行

動を受け易いのだ。さらに三つめの問題は，首都ブリュッセルがなぜヨーロッパ連合の中心地であるのかと言う理由だ。16世紀初頭，低地諸国で生まれたカルロスは，スペイン国王と神聖ローマ皇帝を兼ねて欧州統一の夢を追求した。彼の揺籃の地こそ，ブリュッセルだった。欧州の理想を過去に見出したのである。

さて，本稿の目的は，15世紀末から18世紀初めまでスペイン支配下にあった低地諸国の歴史を，これまでの諸研究の成果を取り入れつつ，通史的に素描することである。そして，同地が抱える固有の問題，周辺諸国との関係，スペイン帝国の中の一封国としての位置付けに触れながら叙述する。

ここで，低地諸国の地域名称について付言する。同地は英語で Low Countries（Netherlands），蘭語で Nederlanden，独語で Niederländen，仏語で Pays-Bas，西語で Países Bajos と言う。広義には，オランダ王国，ベルギー王国，ルクセンブルクのベネルクス三国である。狭義ではオランダを指す。15世紀末から18世紀初頭のベルギー地域は広義に使われ，スペイン領低地諸国，あるいはスペイン領ネーデルラントと呼ぶ。またフランドルという名称は，西語ではフランデス Flandes と言うが，狭義には，現在のベルギー北西部からフランスに至る区域を指す。しかし，西語ではこの意味に加え，広義にスペイン領低地諸国を総称するのに使われることが多い。もう一つ問題があるのは，言語名だ。フランドルで話される言葉は，オランダ系の言葉であるから，これを仏語風にフラマン語と呼ぶのは適切ではない。フラームス Vlaams が本来好ましいが，本稿では日本での慣用に従う。さらにベルギーにおいては地名が二言語で呼ばれる。例えば，英語のアントワープは，フラマン語ではアントヴェルペン Antwerpen，ワロン語ではアンヴェール Anvers となる。本稿では，都市名はそれが属している言語圏に応じて表記するが，慣用的なものはそれに従う。また，オランダという名称は国名として知られるが，本来は州の一つホラント Holland に由来する。日本ではこれがポルトガル語経由で入っているので，語頭の子音が発音されずオランダと呼ばれた。以上のように，同じ呼び方

が狭義でも広義でも使われているのが現状である。本稿では，どちらの意味に用いているか理解できるようにする。

２．低地諸国研究の回顧

さて，ここではスペイン領ネーデルラントに関する研究の一端を示す。18，19世紀の著作はゲーテの『エグモント』，シラーによる『オランダ独立史』が有名だ。前者はスペインにより処刑された低地諸国の貴族を描いた戯曲である。これに霊感を得たベートーベンは『エグモント序曲』を作曲している。後者は未完成のままで終わった。だが，史料を広く用いたのは，米国のジョン・ロスロップ・モートレーの『オランダ共和国の興隆』だろう。スペイン国王フェリペ二世が稀代の暴君として描かれる。

次に20世紀に移る。アンリ・ピレンヌといえば，ヨーロッパ中世の歴史研究に金字塔を打立てたベルギーの歴史家である。『シャルルマーニュとモハメッド』，『中世都市』などで有名だが，『ベルギー史』をも執筆している。そこではスペインに対する評価が著しく小さい。しかも，オランダが事実上の分離を果たしてからは，その扱いが小さくなり，17世紀の低地諸国全般を研究する上では，見通しが悪い。

オランダが写真の陽画とすれば，スペイン領低地諸国はその陰画とされることが多い。そうした立場から，事実上独立したオランダがスペインとの抗争を続け，覇権を掌握する様子を描いた研究がある。ジョナサン・イスラエルの『オランダ共和国とスペイン世界：1606-1661年』，『世界貿易におけるオランダの優越：1585-1740年』などが代表的だろう。オランダとスペインは地中海でも争った。オランダの進出を描いたものにマリー・クリスティーヌ・エンゲルス『商人，もぐり商人，海員と海賊：リヴォルノとジェノヴァにおけるコミュニティー，1615-1635年』がある。また，ジェラール・ファン・クリーケン『海賊と商人：アルジェと低地諸国の関係，1604-1830年』は，オランダとアルジェの両国がスペインに対抗した記述が各所にある。

スペイン領低地諸国を総覧した研究にミゲル・アンヘル・エチェバリア『フランドルとスペイン帝国：1500-1713年』がある。近年では，17世紀の同地域に注目した研究が目立つ。ベルギーでは，オランダとの休戦期に当るアルベルト大公夫妻期の時代を扱った研究がある。1999年にそれを記念した展示会が開催され，論文集『アルベルトとイサベル：論文集』が出た。ヒュー・トレヴァー・ローパー『ハプスブルク家と芸術家たち』はハプスブルク朝の君主四人を扱い，その棹尾を飾るのがアルベルト大公だ。『17世紀研究』240号も有益である。アリシア・エステバン・エストリンガナによる『マドリードとブリュッセル：ポスト大公期の統治関係，1621-1634年』では，オランダとの戦争再開を描く。同女史は『カトリック領低地諸国における戦争と財政：ファルネーゼからスピノラまで(1592-1630年)』で財政と軍事面の関係を論じた。

スペインの17世紀は低地諸国を抜きには語れない。ジェフリー・パーカーは『オランダの反乱』，『フランダース軍とスペイン道：1567-1659年』を公刊した。後者では低地諸国の命脈がライン地溝帯を通る補給路の掌握次第であることを論じた。ジョン・エリオットには『オリバーレス伯公爵』，『スペイン帝国の興亡』がある。エラスムス主義が16世紀前半のスペインで歓迎された状況の理解にはマルセル・バタイヨン『エラスムスとスペイン』が必須だ。増田義郎『新世界のユートピア』にはその要約がある。アントワープにはスペイン政府公認の印刷業者プランタン・モレトゥスがいた。その展示会が2005年日本の印刷博物館で催され，図録には宮下志朗らの記述がある。

3．叙述の構成

この論述では，低地諸国を治めた統治者に基づいて時代を区分し，その順に記述を進めていく。政治権力の動向が同地を支えた大きな要因であるからだ。先ず，第一章では，ハプスブルク家の所領になった低地諸国とスペインとの関わりを描く。第二章では，スペイン，低地諸国双方を統治し

たハプスブルク朝カルロス一世，フェリペ二世の治世を描く。その中で北部諸州がスペインから事実上独立し，のちのオランダになる。第三章では，前半で17世紀初頭の約20年間を扱う。所謂アルベルト大公夫妻時代の平和期である。後半では，アルベルトの死後，スペイン領に復帰した地域がオリバーレスによるスペイン帝国の再編でどう変容を被ったかを描く。この章は所謂複合王制の存立に関わる。言語も文化も法律体系が異なる国々を抱えた帝国をどう運営すべきか。多様なあり方をそのまま踏襲して一種の連邦制を採用するのか，一つの帝国に一つの法体系を遍く貫徹させる中央集権制を採用するかである。こうした問題を考える鍵となろう。

第一章：ハプスブルク家支配に入った低地諸国

1－1：ブルゴーニュ家支配からハプスブルク家支配へ

低地諸国は，ブルゴーニュやフランシュ・コンテ等とともに，ブルゴーニュ公国として繁栄していた。しかし，男系の後継が絶えてハプスブルク家の所領となり，さらに，この王家は，スペイン王家との婚姻関係から，スペインとその海外領を掌握した。ここでは，ブルゴーニュ家シャルル王の落命からカルロス一世がスペイン王になる直前までを描く。

1－1－1：ハプスブルク家への編入

低地諸国はヨーロッパ経済の二つの軸が交差する要衝だった。一つは，南北ルートで，英国からイタリアに通ずる経路でライン地溝帯を抜ける。今一つは東西に走る海路で，東はバルト海から西はスペインに達し，時にジブラルタル海峡を越えてイタリアに達した。人口密度も大きく，発展が著しい地域であった。

さて，ブルゴーニュ公シャルル豪胆王がナンシーで戦死すると，諸都市は彼の遺児マリアに反旗を翻した。彼女は都市の特権の回復を認める一方，オーストリア・ハプスブルク家のマキシミリアン（後の一世）と結婚した。しかし，マリアが1482年頓死すると，マキシミリアンは，息子フィリップ

（後のフィリップ一世）が未成年だったので，摂政となった。1488年から92年にかけて反乱を起こされ，ブリュージュ市のクラーネンビュルフ城塞に数ヶ月監禁されている。1493年には死去した父を継いで神聖ローマ皇帝になり，翌年，成人のフィリップに低地諸国を統治させた。フィリップは，ブリュージュで生まれ，同地の知識人に教育されていたため，フランドルの利益を擁護する人物として期待された。ブルゴーニュ公国は，発祥の地ブルゴーニュやヌヴェールの大部分を喪失しており，フランドルのみが所領だったからだ［17.：p.3］。スペインからフアナを娶った。

1－1－2：スペイン側の状況

スペインではカスティーリャ王国のイサベル女王とアラゴン連合王国のフェルナンドが結婚し，1479年統一スペイン王国が成立。夫妻は敬虔だったのでカトリック両王と呼ばれるが，反乱に悩むマキシミリアンを援護すべく兵を送った。仏を刺激しないギリギリの選択だった。事実，フェルナンド王は，仏と開戦をした際にも，1475年以来ルイ十一世に占領されていたルシヨンとセルダーニャの回復をするだけで満足した。フランスは，1493年のサンリス条約やバルセロナ条約では，領土的な野望を諦めたかに見えたが，実は野望の矛先を転じていた。フェルナンドの義兄弟が治める南イタリアに食指を伸ばした上，ビアンカ・マリア・スフォルツァと結婚したマキシミリアンに継承権がある北イタリアのミラノ公国にも関心を示した［17.：p.5］。1494年イタリアに侵入，翌年ナポリを占領した。スペインと低地諸国は仏への対抗上，急速に接近した。フィリップはカスティーリャのフアナと，マルガリータはカスティーリャのフアンとのように二重の縁組が行なわれた。

フアナはフィリップに輿入れすべく，1496年８月，ビスカヤ湾の都市ラレドを出港した。船団は120隻からなる艦隊で１万人もの軍人も乗船していたが，仏と開戦していたためだ［17.：p.６］。９月９日，スヘルデ河口ヴァルヘレン島アルネムイデンに入港したが，夫フィリップの迎えはなく

同島の住民も友好的ではなかった。夫と連絡がつき，王女はミデルビュルフ，ベルヘン・オプ・ゾームを経てアントヴェルペンに入城した。兵士たちは，翌年の帰港までヴァルヘレン島に宿泊施設も無いまま留置された。フィリップがインスブルクから戻って来，フアナとはアントヴェルペン近郊リールで邂逅，10月20日アントヴェルペンの聖ゴマロ教会で挙式した［17.：p.6］。

1－1－3：急展開

フィリップ美男王はフランドル第一主義に徹し，英仏とは事を構えない中立主義だった。仏王にはフランドル伯並びにアルトワ伯として臣下の礼を取り，英国には，羊毛の原料地として重要視していたから，1496年条約を締結して同国商人に便宜を図った［17.：p.7］。さらに，父王マキシミリアンとは異なり，ゲルデル戦争には参加せず，シャルル・ド・エフモントを救援した仏王の領内通過すら認め，1498年には，即位直後のルイ十二世と条約を結び，ゲルデルはおろかブルゴーニュを奪還する試みをも放棄した［*Loc. cit.*］。その上，反仏に立つスペイン出身の后フアナには冷たく当っていたほどだ。一方，スペインに輿入れしたマルガリータは，将来のスペイン皇后として最大限の歓待を受けた。だが，事態は急転直下し，カトリック両王の周囲に不幸が続く。1497年，スペインの皇位継承者フアンが婚礼式の際，突然死去した。失意のマルガリータは低地諸国に帰還させられた。ポルトガル王に嫁いだイサベルは1498年，その子ミゲルも1500年に頓死。かくてイサベル女王が死ねば，フアナがカスティーリャ王を継承する可能性が濃厚となった。当時，カスティーリャは新大陸を傘下に収めつつあり，フィリップも世界に冠たる王となる可能性が出てきた。

だがスペイン側は，王国の重心がブリュッセルに移ることを極度に警戒したので，娘夫妻をスペインに招き，その子をスペインで教育しようとした。夫妻は息子を低地諸国に残し，同年11月スペインに向かった。仏を通過した際，フィリップは仏王との間で幼少の息子を仏王の娘クラウディア

公女と娶わせる密約を提案した［17.：p.9］。翌年１月26日カスティーリャ国境を越え，同国のコルテス（議会）で夫妻はスペイン王位継承者として承認された。同年夏，イタリアを巡って仏とスペインの争いが再燃したので，フィリップは帰国の途についた。サラゴサを通過した際，アラゴンのコルテスから臣従の誓いを受ける前に衝撃的な条件を提示された［17.：p.10］。義父のフェルナンドが男の子をもうけた場合，コルテスとしてはフィリップを認めない，と。また，フィリップの親仏的な態度も忌み嫌われていたようだ。ともあれ，彼は身重のフアナを残して本国に帰った。フアナにはすでに精神疾患が見られたのだが。帰国したフィリップは外交的方策が悉く失敗した。父マキシミリアンと仏のルイ十二世との和解工作は失敗し，英国は貿易戦争を仕掛けた。スペインのフェルナンドと仏のルイ十二世との講和も不調だった。イタリアでは仏とスペインの対立が再燃し，スペインのコルドバ将軍がナポリから仏軍を一掃するとフィリップとフェルナンドの関係も悪化した［17.：pp.10-11］。

1504年11月末，フィリップはブリュッセルの宮殿でカスティーリャ王を宣言した。しかし，彼はスペイン女王イサベルの死去はおろか，フアナ不在時はフェルナンドが摂政として国政を担うべしという遺言を知らなかった。一方，フェルナンドは，フィリップが遺言を守る意志がないと見るや，諸都市の支持を取り付けるためにトロでコルテスを開催し，自らが摂政を担う旨承認させた。さらに，仏のルイ十二世と和睦し，ジェルメーヌ・ドゥ・フォワと結婚した。だが，カスティーリャでは却って反発を食らった。もし，男の子が生まれれば，カスティーリャとアラゴンの統一は分解するためだ。だが，スペインの貴族はフェルナンドに必ずしも従順ではなかった。カトリック両王の統治下で多くの特権を失ったためだ。その回復には外国王が登場した今こそ好機と考え，ブリュッセルとの関係を築くため使節を派遣した。フアン・マヌエルがそれである［17.：p.12］。また，フェルナンドの統治で冷や飯を食ったカスティーリャ貴族も同様だった。ここで興味を引くのが，コンベルソだ。彼らは異端審問の改革や廃止を要求し

ている。コルドバの異端審問官ルセロが実施した四百人の火刑が，コンベルソだけでなく，旧キリスト教徒にも衝撃を与えた背景があるからだ［*Loc. cit.*］。また，コルテス，コンベルソを問わず審問に不満があった。一つには，異端審問関係所の給料を拘留者から没収した財産で充当することに。今一つは，審問手続きが秘匿され，これはフエロやコルテスに保証されたはずの弁護権が損なわれかねないとしたことだ［*Loc. cit.*］。フィリップは，1505年秋，自らがスペインに赴くまでカスティーリャにおける異端審問の執行を中断するように定めた。

フィリップ夫妻は1506年１月８日，スヘルデ河口フリッシンゲン（榎本武揚が寄港）を出港した。一時，荒天のため英国の港に避難した。英はこの機会に自国商人に有利な条約を締結させた［*Loc. cit.*］。一行は４月27日ガリシアに到達し，味方を増やしていった。フェルナンドはついにフィリップを王位継承者として認知し，摂政引退を宣言した。フィリップは，コルドバの異端審問の責任を取らせるべくデサを更迭したが，次第に支持を失っていった。フアナ女王を幽閉しているのではないか，フアン・マヌエルやフランドル人貴族に特権を賜与しすぎだという不満が高まったからだ［17.：p.13］。その中でフィリップが９月に頓死。フェルナンドが摂政に返り咲き，1516年死去するまでスペインを統治した。後継がいなかったので，枢機卿シスネロスは夫妻の子カルロスを招聘した。

第二章：16世紀の低地諸国

２－１：カルロス１世の時代

２－１－１：カルロスの歩み

カルロスは，スペイン王カルロス一世，神聖ローマ皇帝カルロス５世（カール５世）として知られる。欧州各地を転戦し，カトリックとプロテスタントの宗教的統一を図る一方，オスマントルコに対峙した。幼少時は，ブリュッセルに近いメヘレンで，伯母のマルガリータやフィリップの顧問官シエーヴル公ことギヨーム・ドゥ・クロワ，ユトレヒト司教でローマ教

皇にもなるアドリアン・ブイェンスに養育された。1515年成人になり，低地諸国の統治が認められた。翌年１月23日スペイン王フェルナンド死去の報を聞き，３月13日には聖グドゥラ大聖堂でカスティーリャ王たることを宣言した。しかし，シスネロスらが反対していたので，アドリアンを派遣して説得に当らせた。その間，スペインからは猟官運動や陳情でブリュッセル参りが頻繁だった。シエーヴル公やジャン・ル・ソヴァージュの下には，後の秘書官フランシスコ・デ・ロス・コボスや，異端審問所の専横に我慢できないコンベルソが再度来た［17.：p.14］。また，アドリアンの下には，インディオを搾取することに反対してコロ計画を提起したドミニコ会士ラス･カサスが訪れた。もっとも，異端審問の廃止はル・ソヴァージュの死で中断し，入植計画も失敗に終わった［*Loc. cit.*］。

ともあれ，カルロス自身，同年９月８日フリッシンゲンを出港，ビリャビシオサに入港，スペインの地を踏んだ。トルデシーリャスに赴いて初めて，カスティーリャの高官に歓迎された。あくまで王子に過ぎないため，それまで迎えが無かったからだ。同地で幽閉同然の母后フアナに十年ぶりに再会した。おそらく，シエーヴル公の説得でフアナもカルロスとの共同統治を承知したに相違ない。とまれ，カルロスはスペイン王となり，シスネロスも死んだ。トレド大司教には，先のクロワの甥であるギヨーム・ドゥ・クロワが任命された。スペインの司教職には外国人を当てないという条項を無視してのことだ。トレドの地は羊毛生産が盛んで，非常に実入りの大きな土地であったからだろう。こうしたフランドル人優遇や神聖ローマ皇帝選挙の工作費としてカスティーリャ議会を買収したことが，コムネーロスの乱を誘引した。カルロスは父王マキシミリアンの死で1520年神聖ローマ皇帝に選出された。その対抗馬は仏出身のフランソワ一世だった。1525年パヴィーアの戦いでカルロスが勝利を収めるまで，両者はイタリアや低地諸国をめぐって争った。翌年のマドリード協定でカルロスは，フランドル，アルトワに対するフランスの宗主権を放棄させ，低地諸国とフランスとの国境問題を片付けた。1539年ヘントで蜂起した市民は，フランス

王から援助を受けられず，カルロスの軍に鎮圧された。低地諸国は1507年以来，伯母のマルガリータが統治していたが，彼女が死ぬと，カルロスは，ハンガリー王の寡婦で妹のマリアに任せた。同時に国務評議会，内政評議会，財政評議会といった諮問機関を設置した。

2－1－2：エラスムス主義の興亡

欧州の中でスペインほどエラスムスが人気のあったところはない。エラスムス思想の源泉は，低地諸国に起こったいわゆるデヴォティオ・モデルナの運動であろう。とりわけ14世紀に登場したヤン・ファン・ルイスブルクに由来する。エラスムス主義の特徴は，次の四つにまとめられる。1）原典に回帰すること。2）俗語で聖書を読むこと。3）外見よりは内在的なキリスト教を重視。4）声に出すよりは，心のうちでの祈りを重視した。

スペインであれだけの熱狂を持って迎えられた要因には，ユダヤ教徒からキリスト教に改宗したいわゆるコンベルソの苦しみ救ったからである。言い換えると，新参者のコンベルソは，古くからのキリスト教徒に偽のキリスト教徒であると猜疑心を持たれており，エラスムスの教えは，自らの信仰心を保障してくれたからだ。とりわけ，スペイン語に訳された『エンキリディオン』がその手引きとされた。さらに，内面性を重視する，中世以来の神秘主義の運動が下支えをした側面もあろう。フランシスコ・デ・オスナの『霊操の初歩』（1527年）に代表される。

2－2：フェリペ２世の時代

2－2－1：低地諸国問題

カルロス１世から譲位されたフェリペ二世は，即位早々57年国家破産に見舞われたが，59年にカト・カンブレジ条約により仏と講和を結んで北辺の守りが確保されて初めてフェリペはスペインに赴いた。低地諸国の統治は姉のマルガリータに任せ，グランヴェルに補佐させた。また，1562年に同地が，独の支配を受けない独立した司教区となった。仏からの脅威は

解消したものの，今度は仏からカルヴァン派が浸透することになった。フェリペはスペイン化を目指して，この地に異端審問を導入した。56年の聖画像反対運動は各所に飛び火し，反乱が続出した。事態を憂慮したフェリペは，翌年アルバ公を派遣した。アルバ公はイタリアを立ち，低地諸国に向かった。彼の軍が行軍したルートは，以後“スペイン道”として南北を貫く重要な軍用路として機能することになる。ただし，このルートは，ドイツ諸国や仏の態度如何では死命を制せられた。到着したアルバ公は，“血の評議会”を設置し，マルガリータに代わり異端の摘発に乗り出した。オラニェ公は辛くもドイツ領に亡命したが，穏健派のホールネ伯やエフモント伯は68年処刑場の露と消えた。以後80年間がいわゆる“80年戦争”と呼ばれることになる。一時は大半が反乱州となったが，スペイン側も巻き返した。パルマ公ファルネーゼは79年，南部の州をまとめアラス同盟を結成させた。北部の反乱州はこれに対抗してユトレヒト同盟を結成した。かくて，現在のオランダ，ベルギーの原型が出来た。

2-2-2：アントヴェルペンの印刷文化

アントヴェルペンといえば，15世紀末ブリュージュに代わり台頭してきた商業都市である。ポルトガル人が香料取引の場にしてからは尚更である。カブラルがインドで買い付けたことがその契機である。ポルトガル人は，後にベネチア商人がエジプトのスルタンから香料の販売権を獲得することで脅威を受けたものの，それでも1530年代までは他を圧していた。以後も中継貿易，金融の拠点として発展した。

同時にアントヴェルペンは出版の拠点でもあった。科学書出版が盛んだったのは，1550年から1585年までである。経済的発展のピークを過ぎた頃から，ファルネーゼ指揮下のスペイン軍に陥落させられた1585年の時期に当る［13.：p.292］。出版されたジャンルの一つは薬学や園芸である。ドドネウス，クルシウス，ロベリウスの植物図録が出版されている［13.：p.288］。また第２のジャンルは実用的な数学書で，それは三つに分かれる

［13.：p.293-294］。すなわち商売に必要な簿記，実用的な地図，それに築城術である。地図は，1570年『世界の舞台』を製作したオルテリウスが有名である。メルカトルの地図に比べ，実用に適していた。また，築城術は，1567年アントヴェルペン市に要塞（スヘルデ左岸にある）の建設が始まったことに関連する。このとき建設に当った技師はイタリア人フランチェスコ・パチョットである［13.：p.294］。イタリア北部と同様，低地諸国は平坦な土地であるから，敵国の侵入に備えるため都市を要塞化する必要があったためだろう。こうした技術は，のちに新大陸にあるスペイン領の拠点を武装化する際にも参考にされたに相違ない。

アントヴェルペンの代表的な出版人といえば，クリストーフ・プランタンである。彼の経営した印刷工房は現在，プランタン・モレトゥス印刷博物館として世界遺産に指定されている。スペインとの関連で言えば，『多国語聖書』の出版を推進したのがプランタンだ。彼は1520年頃フランスのトゥールで生まれ，のちカンで製本技術を学び，1548（49）年アントヴェルペンに移住。当初は皮革職人として働き，1550年には聖ルカ組合という印刷ギルドに加入，異端者で“愛の家族”の創立者であるヘンドリク・ニクラースの援助を受けて［15.：p.241］，印刷所を開設した。商売が見込めるので，カトリックだけでなくプロテスタント関係の書をも印刷した。さすがに後者の書は彼自らが手懸けず，密かに腹心をカンペンやヴェーゼルに派遣して印刷させた［*Loc. cit.*］。1562年パリ滞在の折，異端文書を印刷したかどで同工房は官憲に踏み込まれ，印刷事業は中断させられた。その後新たに四人と共同して事業を再出発した。だが，そのうち三人が筋金入りのカルヴァン主義者ということもあり［*Loc. cit.*］，アルバ公が“血の評議会”を設置した1567年には事業を閉鎖した。この頃からカトリックであることを強調する必要に迫られた。

そうした不穏な情勢の中，彼はスペイン人の保護者であるガブリエル・デ・サヤスを通じ，多国語聖書出版の計画を提起した。サヤスはフェリペ２世の秘書官だ。まだ皮革職人だったプランタンが，装飾品を彼に届けよ

うとして負傷をして以来親しくなった人物だ［*Loc. cit.*］。今回の多国語聖書は，かつてシスネロス枢機卿が編纂したアルカラ版多国語聖書を参照しつつ，四言語による聖書本文（ヘブライ，カルデア，ギリシア，ラテン語）に加え，付録をつけて八巻本を1568年から73年にかけて出版した。スペイン人文主義者ベニト・アリアス・モンターノの協力で教皇庁から出版許可を得たこと，娘婿に上記の四言語に堪能なフランシスクス・ラファレンギウスを迎えたことが成功の要因だった［*Loc. cit.*］。

彼はさらに新たなプロジェクトを構想し，トレント宗教会議の決定に即した祈祷書を出版することにした。グランヴェル枢機卿を通じ，ローマから許可をもらい，併せて低地諸国における製作独占権を獲得した。もっとも，リエージュやケルンの業者がこの独占権を無視して印刷したのだが［Loc. cit.］。彼にとっては有り難いことに，多国語聖書の出来に満足したスペイン王から，スペインとその海外領で聖務日課書やミサ典書を独占的に販売できる権利を賜与された［*Loc. cit.*］。こうした宗教関係書は17世紀に至っても大きな収入源となる。

1576年11月４から６日にかけ，アントヴェルペンはスペイン兵の略奪に遭った。彼も財産や出版物を失っている。海外の友人に融資を仰いだ他，1583年には，支店をオランダのレイデンに設置した［15.：p.242］。大学町として出版物の需要が見込める土地である。だが，叛徒に占領されていたアントヴェルペンがファルネーゼにより陥落させられると，プランタン自身はレイデンの出版工房を娘夫婦に任せ，自らは帰還した。なお，レイデンの工房は1618年まで続き，そのあとエルゼヴィア家が継いだ。疲れを知らぬプランタンも1589年に死去した。1555年から89年までに出版した書籍は約2450種に上るという［*Loc. cit.*］。その後は，次女マルティナとその婿ヤン・モレトゥスが継いだ。

なお，アントヴェルペンは1545から70年にかけ，スペイン本国よりもスペイン語の出版数が多かったらしい。出版人の一人がマルティヌス・ヌティウスである。彼の手になる著作を例示しよう。ボスカンやガルシラソの

著作，作者不詳の『ラサリーリョ・デ・トルメス』，ペドロ・シエサ・デ・レオン『ペルー誌』，フランシスコ・デ・ゴマラ『インディアス史』，さらに，ルイス・デ・グラナダ，ディエゴ・デ・サン・ペドロ『愛の牢獄』，作者不詳『ラサリーリョ・デ・トルメス第二部』等がある［9-2.：pp.120- 122］。

第三章：17世紀の低地諸国

3－1：アルベルト大公の時代

アルベルト大公が低地諸国を統治した期間は，1598年から1621年までである。スペインではフェリペ三世の御世である。一般的には，欧州各国が休戦を指向し，低地諸国にとっても久々の平和が到来した時期である。それ故，大公時代は追憶を持って語られる時代なのだろう。アルベルト大公といえば，大画家ルーベンスの庇護者として，美術史ではアルブレヒト大公の名で呼ばれる。大公は，オーストリア・ハプスブルク家の出身であるためにドイツ語で呼ばれるからだ。もっとも，スペイン王フェリペから見れば従兄弟なのだが。本稿では，スペイン史における人物として扱うのでアルベルトと呼ぼう。

3－1－1：低地諸国の分離

フェリペ二世は積年の戦いに倦み，スペイン帝国を経済的・軍事的な破綻から救う一環として，低地諸国を分離しようとした。そこで，オーストリア・ハプスブルク出身のアルベルトに白羽の矢を立てた。娘のイサベル・エウヘニアを嫁がせ，同地を夫妻で共同統治させようと構想した。アルベルトはスペインと縁が深い人物である。スペインで養育され，後にはスペインの中心的な教区であるトレド大司教を務め，さらにはスペインに併合されたポルトガルの副王をも歴任しているからだ。その後，低地諸国の総督に任ぜられ，上記のイサベルと結婚した。

しかし，フェリペ二世は，夫妻に様々な条件を付けた。それが，1598年

５月６日に発せられた譲渡条項だ。それによると，第三・四項では，夫妻が嫡出子を残さない場合，同地の領土はスペインに返還することが定められていた。また，第五項では，夫妻は同地を封土にできないとある。さらに第六項では，男の継承者がいない場合，娘はスペイン王ないしその継承者と結婚しなければならず，もしそれが不可能な場合には，スペイン王室に予め許可を求める必要があった。もちろん，男系の後継が生まれる場合にも条件がある。第七項によると，夫妻の嫡出子の結婚は誰であろうと，スペイン王の許可を必要とした。第十項では，王位継承者はカトリックに限定され，すでに王位にあってもプロテスタントである時，スペインがその位を剥奪できるとされた。また，第十一項で，どのスペイン王も，即位時に譲渡事項を認めるものとされた。譲渡条項の核心は以上の如くであるが［16.：pp.2-3］，スペインの影響力を殺がぬよう細心の注意を払われた。

だが，それ以外にも秘密条項があった。とくに軍事に関するものだ。スペイン軍は，アントヴェルペン，ヘント，カンブレーの三要塞に駐留するが，大公夫妻の指揮権からは独立するものとされた。アルベルト大公は，最高指揮官とはいえ，名目上に過ぎず，スペイン王の策定した軍事行動に従う必要があった。また，仏やオランダからの占領地はスペインが統治することとされた［16.：pp.3-4］。宗教面に関する言及もあり，アルベルトもその後継者も異端の根絶に勉めるよう督励された［16.：p.4］。

３－１－２：休戦への道のり

オランダ共和国は，マウリッツ・ファン・ナッサウを中心に攻勢に出た。海岸沿いに侵攻して，港町オステンドを占領した。海路を断たれることを恐れた大公は，同地を1601年から３年間包囲した。大公に代わり軍を指揮したジェノヴァ出身のアンブロジョ・スピノラが海陸双方から攻撃を加え，ようやく陥落させた。その勢いを駈って，フリースラントに侵攻してオランダを叩こうとしたが，傭兵に反乱を起こされてその夢も潰えた。ついに，オランダ・スペイン両国が平和交渉を行ない，1609年から21年まで12年間

の休戦を迎えることになる。

休戦が成立した状況はいくつかある。スペイン軍の戦争継続が不可能になったこと。オランダ側もアルミニウス派をバックとする，穏健派のオルデンバルネフェルトが執政を担当し休戦を望んだこと。また，英国にしてもエリザベス一世が死去し，次のジェイムズ一世が1604年スペインと講和したため，スペインは海軍をドーバー海峡を通過でき，オステンドの陥落を促進できたからだ。なお，ジェイムズ王は英国国教会を支持したが，親スペイン的なので息子をスペインの皇族と縁組させようとしたほどだ。

3－1－3：カトリック化の強化

アルベルト大公夫妻は，南ネーデルラントの団結を強めるために様々な芸術の保護に努めた他，信仰の地としての教会建設に尽力した。ここでは，マリア信仰に関わるモンテギュ Montaigu（蘭語ではスヘルペンフーヘル Scherpenheuvel）信仰を扱う。

アントヴェルペンから東に進むと，ジヘムの町があるが，その近辺にモンテギュと呼ばれる小さな巡礼地がある。小さな丘にいかにも安普請の礼拝堂があり，そこには木製のマリア像が安置されていた。この像が血の涙を流したという噂が広まるや，たちまち巡礼者が殺到した［2.：p.424］。ここのマリア像は当初，“ジヘムの聖母”（仏）Notre Dame de Zichem と呼ばれたが，のちには“モンテギュの聖母”（仏）Notre Dame de Montaigu“スヘルペンフーヘルの愛すべき聖母”（蘭）Onze lieve vrouw Scherpenheuvel となった［2.：p.424 ］。大公夫妻はこの動向を見逃さなかった。1603年７月，堅牢な礼拝堂を建設するために献金を行なった上に，礎石を据えるために代理人を派遣した。聖マリア奉献祭前夜の11月20日には夫妻自ら現地入りして，マリア像の前に立った。そして，ボワ・ル・デュク市がナッサウ家マウリッツ率いるオランダ軍の襲撃を撃退できたことに感謝を述べた。併せて，自らも参加するオステンド包囲戦が一刻も早く勝利に終わるよう祈念した。翌年９月22日にオステンドが陥落すると，二

人は再びモンテギュに赴き，勝利のお礼を述べた。そして二人にオステンド市の鍵が手渡される様をあしらったプラトーを奉献した［Loc. cit.］。

1605年以降，同地の周辺には次第に集落が増えていったので，大公は憲章を賦与し，町として認知した上，先に陥落したオステンドと同様，税金の免除措置を実施した。07年に，オランダとスペインが休戦すると，早速モンテギューの地を大巡礼地に変えるべく，教会建設に着手した。礎石を据えたのが1609年７月２日で，スペイン・オランダ両国による12年間の休戦が発効した日であり，マリアの聖エリザベツ訪問の日にも当る祈念すべき日だった［2.：pp.424-425］。建設を任された人物が建築家ヴェンツェル・コーベルヘルである。巡礼に相応しい建物とするだけでなく，オランダ軍に急襲された経験から城塞の性格を加味した［2.：p.427］。同人は小額貸付を行なう質屋を1618年アントヴェルペンに開設している。

教会関係者もモンテギュの聖母マリアが行なったとされる奇蹟に関心を持ち，その伝承の精緻化に努めた。メヘレン大司教に奇蹟の調査を委託されたフィリップ・ニューマンは，1604年その結果を公表した。そのタイトルは，『ブラバント州ジヘム市近郊スヘルペンフーヘルと呼ばれる場所で先日聖母の仲介により数多く生じた奇蹟伝』（蘭）“Historie van miraculen die onlancx in grooten getale ghebeurt zyn door de intercessie ende voorbidden van die Heylighe Maget op een plaats genoemt Scherpenheuvel bij die stad Sichem in Brabant”である［2.：425］。続いて，フランス語版やスペイン語版も出版された。スペイン語版は，『ブラバント伯領ジヘム近郊モンテアグドの聖母を通じて働きかけて下さった奇蹟伝』“Historia de los Milagros que en Nuestra Señora de Monteagudo cerca de Sichen en el ducado de Brabante, nuestro Señor ha sido servido de obrar”（1604）がタイトルである［*Loc. cit.*］。法学者ユストゥス・リプシウスも『ジヘムすなわちアスプリコレンスの女神』“Diva Sichemiensis sive Aspricollensis”（1605）を公にして奇蹟を称えた［*Loc. cit.*］。

こうした印刷攻勢には，プロテスタント側も等閑視できなかった。自ら

も『悪魔学』の著書がある英国のジェームズ一世が関心を示したらしい。オーストリア・ハプスブルク家のルドルフ二世と趣向が似ているところが興味を引く。ともあれ，ジェームズはブリュッセル駐在イギリス大使のジョージ・トンプソンやその後任ウィリアム・トランブルによる報告がその情報源だったらしい［*Loc. cit.*］。モンテギュのマリア信仰は，のちに，ジヘムやその近辺にあるディーストの守備隊が各地を転戦する中で，従軍司祭が各地に伝えることになった。例えば，スペインに帰った兵士により，ビスカヤ地方に伝えられたし，1609年にはナンシーのイエズス教会にはこのマリアを称える礼拝堂が設けられた［2. : p.424］。

3－1－4：戦争の再開

さしもの大公時代もその末期には戦争に巻き込まれた。あの三十年戦争である。事の発端は，現在のチェコのボヘミア地方だった。同地は1612年からフェルディナンドが統治し，新教徒に対する弾圧を行なったため，新教徒が1618年決起した。ハプスブルク朝の役人二人を窓から突き落とした事件を皮切りに，彼らはフェルディナンドを追放して，新たにファルツ伯フリードリヒをボヘミア王に選んだ。

このことはスペインにとっては脅威だった。兄弟国のオーストリアが危殆に瀕しただけでなく，ライン地溝帯を通るスペイン道をファルツ公国が遮断すれば，低地諸国が孤立する懸念があったからだ。そこで，スペイン本国はもとより，低地諸国からも何人かの将軍が係争地に派遣された。ジェノヴァ出身のスピノラ，フランドル出身のティリーとビュクワ公がいた。最後のビュクワ公はボヘミアの新教徒を“白山（ビラ・ホラ）の戦い”で打ち破った人物である。褒賞として同地に封土を与えられ［7. : p.201］，その子孫は第二次世界大戦終了後追放されるまで居住していたらしい［1. : p.399］。また，ティリー将軍らに敗北したファルツ公フリードリヒは，オランダに亡命することになる。オランダが急進化する背景には，こうした域外からの亡命者の動向と関連があるのだろう。

3－2：ポスト大公時代

3－2－1：イサベル総督

スペインでフェリペ四世が即位した1621年，アルベルト大公が死去した。これは，時代を画する年である。一つには，かねてからの条項通り，低地諸国は再びスペイン領になったことだ。相対的に自立したありようが崩されるのがこの時代だ。しかも，王の寵臣オリバーレス伯公爵がスペイン帝国を再編する中で，他の地域と同様，スペイン帝国の負担をこれまで以上に引き受けねばならなかった。さらに，オランダとの12年間の休戦条約が失効し，同国や仏の脅威を直接受けることになる。

急激な変化は現地の動揺を引き起こしかねないところから，改編は慎重だった。スペインとの関係においては三点ある［14.：p.497］。第一に，寡婦イサベルは総督に任ぜられたが，従来の権限の多くを保持した。第二に，スペイン軍総指揮官アンブロジョ・スピノラは留任した。第三に，法的には解消すべきはずのブリュッセル駐在大使アロンソ・デ・ラ・クエバも留任した。さらに域内向けとして二点ある［*Loc. cit.*］。一つは，低地諸国の貴族に対し，名誉称号を与え，その懐柔に努めた。また，僧侶，貴族，平民には従来通り域内政治に関わる権利を保障した。慎重に事を図った上で，オランダとの戦争再開を認めさせた。

しかし，たちまち1627年には，フェリペ四世下では初の財政破綻が生じた。スペイン政府は戦争を続行しようとしたが，スピノラ将軍は，戦費なくして戦争は不可能と判断して指揮官の職を辞した。彼はもともと現地のネットワークを利用する指揮官ゆえ，本国政府の露骨な容喙を好まなかったため，オリバーレスから詰め腹を切らされたのだ［14.：p.498］。かくて，アルベルト時代の遺風は終わりを告げた。しかし，問題は，低地諸国はスペイン領に復したが，その安全を保障する軍事的な中心がいなくなったことだ。しかも，オランダ軍はフレデリック・ヘンドリック指揮の下，南ネーデルラントの北部を蚕食し始めていた。そこで，オリバーレスは，矢継ぎ早に手を打ち，まず高齢のイサベルに代えてフェリペ王の弟フェルナン

ドを総督に起用し，次に腹心ともいえる人物を登用した。

オリバーレスにとり，伝統的貴族層は不信の対象でしかなかった。そこで，スペインに対する忠誠心を得られる層として，高位聖職者を選んだ。ブリュッセルにある国務評議会のメンバーに，ジャック・ボーネンとアントワーヌ・トリーストを任命した。それぞれ，メヘレン大司教，ヘント司教である。両人は，身分制議会等の有力者ゆえ，同会議をまとめられると期待された。しかも，トリーストはスペイン帝国の共同軍である連合軍に，フランドル地域が参加するのに尽力した人物だった［14.：p.500-501］。オリバーレスはさらに法曹家の起用を考えた。同地は，統治機関が分立し，成文法や慣習法も複雑であった。錯綜した法律の網を整理しスペインの利益に変える必要があった。そこで，彼の意を汲んだ現地出身の法律家を抜擢し，スペインの指令を忠実に実行させようとした［14.：p.501］。それがピエール・ローセである。

3-2-2：ピエール・ローセ

ピエール・ローセの経歴をまとめておく［14.：p.502］。1586年アントヴェルペンに生まれた。父はジャン・ローセ，フランドル伯領出身の商人で1573年アントヴェルペンに移住した。母はマリー・キンスホット，テュルンハウト地区王室領の収税官アンブロワーズ・キンスホットの娘だ。ローセは，ルーヴァン大学で法律を学んだ後，弁護士に。1616年にアルベルト大公から，ブラバント評議会で財務問題を担当する顧問官に指名された。王権擁護者としての働きぶりが評判をとり，1622年，内務評議会の顧問官として，南ネーデルラント全体の財務を担当，1627年にはフランドル・ブルゴーニュ最高会議の一員になる。1629年の危機の際に頭角を現わし，国務評議会の一員になった。

オリバーレスに呼ばれてスペインに渡ったローセは，総督フェルナンドに対する指令書を作成し，次のように筋をまとめた［14.：pp.503-504］。総督は国王の命令を忠実に執行すべきで，判断を交えてならないこと。ま

た，身分制議会を王権に服させること。さらに看過できない一行を加えた。内務評議会の主席議長の権限が飛躍的に増え，総督は，主席議長による内政事項の決定ほぼ全てに対し，同意を与えねばならず，一方，主席議長は，総督を補佐するだけでなく監督するもの，とされた。

彼の不在中，オランダとの抗争は停戦に持ち込まれた。各州議会が停戦を求めた上に，イサベルが手腕を発揮しアイトナ公の工作も功を奏したからだ。だが，スペイン政府はこれを好まなかった［14.：p.504］。1632年，ともあれローセは南ネーデルラントに戻り，主席議長に任命された。折りしも貴族による反乱未遂計画が発覚，その首謀者ベルフ伯は亡命，国務評議会長を狙っていたアールスホット伯は追放された［*Loc. cit.*］。この時，オランダとの講和論者が声を上げた。それがエーリク・デ・ピュッテだった。1633年『戦争と平和のバランス』“Statera belli et pacis”を著し，フェリペ四世に対して低地諸国を放棄し，今や，ヴェスパシアヌス帝がヤヌスの神殿を閉鎖したように，講和に踏み切って世界との協調を果たすべきだ，と主張した［3.：p.267］。これに組したのがアルベルト・ストゥルッツィとヤン・ヴァウエルだが，後者の立論は興味を引く。彼はローセの徒だったが，後にアールスホット伯の影響で意見を改め，オランダとの共存を示唆した。彼によると，オランダは対外強硬派のゴマルス派が政権を掌握しているが，スペインは穏健派を切り崩して講和に持ち込み，両国間の貿易を再開する。オランダは富を築くのに汲々としてスペインに対する敵意を喪失するだろうし，ついにはスペインとの貿易に専心し，新大陸に対する食指を伸ばさなくなるだろう，と考えた［3.：p.266］。自由貿易による平和論の構想だった。だが，オランダも強硬姿勢だったため，講和派の流れは潰え，ガスパール・ファン・バールレの主戦論者が幅を利かせた。

ローセは有力貴族の権威を貶めただけでなく，同僚でもある法学者にも専横を揮い，ボワスホットらを追放した［14.：p.507］。また，総督フェルナンドに対し，戦争評議会でも軍隊の指揮権を掌握しようとしたこともあった［14.：p.509］。もちろん，将官には不評であった。その上，スペイン

に設置されている，フランドル・ブルゴーニュ領最高評議会にも腹心を派遣していたから，ローセには宮廷の状況を正確に把握していた。専横甚だしき面はあるが，指令を忠実に実行してくれている以上，ローセの存在はスペインには必要だった。ただし，財務評議会にスペイン人を入れようとするフェリペの要求には伝統的な慣習と特権を盾に反対したことを考慮すれば，ローセによる権力独占の弊害が現れつつあった［14.：p.511］。

専横を極めたローセだったが，1643年オリバーレス伯公爵の失脚で後ろ盾を失い，実権が削がれていった。先ず，スペイン側は，新任のメロ総督に対する命令書を保留し，その発令まではアルベルト大公時代の命令書を適用し，総督は全ての案件を必ずしもローセに諮る必要が無くなった［14.：p.514］。次のカステル・ロドリーゴ総督も，同じように古い命令書を適用する一方，ローセをスペインに派遣する格好で追放し［14.：p.515］，ローセに代わる新人物としてシャルル・ドヴィヌを選んだ［*Loc. cit.*］。

さらに，ローセがヤンセニウスの徒だったことも忌避される原因だった［3.：pp.362-363］。ヤンセニウスは，1635年ローセと共に『軍神フランス』“Mars Gallicus”を執筆し，リシュリューならびに仏の王権を非難した。この功績でイープルの司教に任命された。低地諸国の有力聖職者ボーネンやトリーストにも支持されていた。死去の２年後1640年に『アウグスティヌス』が出版された。その中で，人間はその本性が現在により頽廃しており，自由意志を持たないと論じている。予定説を主張したバニェスと自由意志を唱えたモリーナによる論争を想起させる。ついに，1641年には同書の読書が禁ぜられたという経緯があった。

第四章：結びにかえて

スペイン史における低地諸国の歴史は，帝国のアキレス腱であっただけでなく，複合王制のありようを反映している。一つの帝国を一つの法でまとめてしまうか中央集権制か，諸地域の多様性を認める一種の連邦制の選択に揺れていた。17世紀のアルベルト大公時代が後者の，ピエール・ロー

セの時代が前者の代表例となろう。今後は，同地域で形成された思想がスペインに与えた影響を考察する必要がある。ジャンセニズムやその系譜にあるファン・エスペンの思想が対象となろう。

【参考文献】

1. Chaline,Olivier. “Charles-Bonaventure de Longueval, Comte du Buquoy (1571-1621)”, *XVIIè Siècle*, 240 (2008), pp. 399-422.
2. Duerloo,Luc. “Scherpenheuvel-Montaigu: un sanctuaire pour une politique emblématique”, *XVIIè Siècle*, 240 (2008), pp. 423-440.
3. Echevarría, Miguel Ángel. *Flandes y la Monarquía Hispánica, 1500-1713*. Madrid: Sílex, 1998.
4. Elliot, John Huxtable. *The Count-Duke of Olivares, the Statesman in an Age of Decline*. New Haven: Yale Univ. Press, 1986.
5. Engels, Marie-Christine. *Merchants, Interlopers, Seamen and Corsairs:the “Flemish” Community in Livorno and Genoa (1615-1635)*. Hilversam: Verloren, 1997.

6-1. Esteban Estríngana, Alicia. *Madrid y Bruselas: Relaciones de Gobierno en la Etapa Posarchiducal (1621-1634)*. Leuven: Leuven Univ. Press, 2005.

6-2. ——. *Guerra y Finanzas en los Países Bajos: De Farnesio a Spínola (1592-1630)*. Madrid: Laberinto, 2002.

7. Evans, Robert John Weston. *The Making of the Habsburg Monarchy, 1550-1700*. Oxford Univ. Press, 1979.

8-1. Israel, Jonathan. *Dutch Primacy in World Trade, 1585-1740*. Oxford Univ. Press, 1989.

8-2. ——. *La República Holandesa y el Mundo Hispánico, 1606-1661*. Madrid: NEREA, 1997.

9-1. Moll, Jaime. “Una Imprenta para la Biblia Regia,” in (eds.) Werner Thomas and Robert A. Verdonck, *Encuentros en Flandes*, Leuven: Leuven Univ. Press, 2000, pp. 319-326.

9-2. ——. “Amberes y el mundo hispano del libro,” in (eds.) Werner Thomas and Robert A. Verdonck, *Encuentros en Flandes*, Leuven: Leuven Univ. Press, 2000, pp. 117-131.

10-1. Parker, Geoffrey. *The Dutch Revolt*. London: Allen Lane, 1977.

10-2. ——. *The Army of Flanders and the Spanish Road, 1567-1659*. Cambridge Univ. Press, 2004.

11. Sáenz-Badillos, Ángel. “Arias Montano y la Biblia Políglota de Amberes”, in

(eds.) Werner Thomas and Robert A. Verdonck, *Encuentros en Flandes*, Leuven: Leuven Univ. Press, 2000, pp. 327–340.
12. トレヴァー・ローパー，ヒュー『ハプスブルク家と芸術家たち』朝日新聞社，1995年.
13. Vanpaemel, Geert. "Science for sale: the metropolitan stimulus for scientific achievements in sixteenth-century Antwerp", in (ed.) Patrick O'Brien, *Urban Achievement in Early Modern Europe*, Cambridge Univ. Press, 2008, pp. 287–304.
14. Vermeir, René. "Les limites de la monarquie composée. Pierre Roose, factorum du comte-duc d'Olivares aux Pays-Bas espagnols", *XVIIè Siècle*, 240 (2008), pp. 495–518.
15. Waterschoot, Werner. "Antwerp: books, publishing and cultural production before 1585", in (ed.) Patrick O'Brien, *Urban Achievement in Early Modern Europe*, Cambridge Univ. Press, 2008, pp. 233–248.
16. Werner, Thomas. "Andrometa Unbound: The Reign of Albert and Isabella in the Southen Netherlands", 1598–1621, in (eds.) Werner Thomas and Luc Duerloo, *Albert and Isabella, 1598–1621*, Brepols, 1998, pp. 1–25.
17. Werner, Thomas and Stols, Eddy. "La integración de Flandes en la Monarquía Hispánica", in (eds.) Werner Thomas and Robert A. Verdonck, *Encuentros en Flandes*, Leuven: Leuven Univ. Press, 2000, pp. 1–73.
18. 宮下志朗（編）『プランタン・モレトゥス博物館展，印刷革命が始まった：グーテンベルクからプランタンへ』凸版印刷 2005年.